



得度式厳修
大般若祈祷会

龍源寺報

91号

年末年始 諸行持のご案内

除夜の鐘

日時：12月31日 23時45分～

場所：龍源寺境内鐘楼堂

年始・初参り

日時：1月1日（船山・船山新田。檀信徒以外も来寺されます）

1月2日（上記以外の檀信徒）

午前8時～11時半（11時半より、日中諷経）

納めていただくもの：浄財、あるいは一升のお米

差し上げる物：「立春大吉」「鎮防火燭」のお札など

参拝方法

庫裡よりお入り頂いたら、本堂にて本尊様→位牌堂→住職→副住職子弟（こちらでお札などを差し上げます）。本堂での参拝終わりましたら、庫裡囲炉裏端で喫茶（自由）。

年始にてお渡しするお札は、正月三ヶ日早朝に厳修される大般若祈祷でお供えしたお札です。「立春大吉」は大本山永平寺御開山・道元禅師に由来し、「鎮防火燭」は大本山總持寺御開山・瑩山禅師に由来するお札で、このお札が玄関にあることで曹洞宗の檀信徒であることも内外に示すものとなっています。

恒規大般若祈祷会 ご案内

日時：令和8年6月14日（日）

4月頃、地元檀信徒には世話人を通して案内を通知します。

遠方檀信徒で参加希望の方は龍源寺までご連絡ください。

編集発行

曹洞宗 龍源寺
深見山
〒949-8311
新潟県中魚沼郡津南町
中深見乙1118番地
☎(025)765-3055



【公式HP】<http://www.shinkenzan.com>



【公式Instagram】@shinkenzan1582



星見天海老師の実相
 (小説家・関根則男氏講演会)

令和七年十月二十一日、龍源寺本堂にて、『蒼天の星』著者・関根則男氏による講演会が開催されました。御寺院・檀信徒合わせ五十三名という大勢の参加、盛況のうちに幕を閉じました。私自身も改めて勉強になる、実りの多い講演会でした。

合わせ、関根氏所蔵の星見天海老師始め天海老師周辺の永平寺・總持寺両本山の禅師さまや良寛さまの墨蹟展も開催致しました。



龍禪上座法衣・雲水道具二式御寄付
 船山 富澤肇 殿
 寛禪上座法衣・雲水道具二式御寄付
 正面 藤ノ木忠夫 殿

令和七年七月二十七日、大般若祈祷会と龍源寺副住職の長男と次男の得度式を修行致しました。子供達の夏休みに合わせてということですが、暑い時期での修行となつてしまいましたが、大勢の檀信徒にご参加いただきました。酷暑の中ありがとうございました。また、富澤肇様、藤ノ木忠夫様より二人の儀式のために多額の御寄付を納めていただきました。重ねて御礼申し上げます。

得度式は曹洞宗の僧侶としての第一歩となる儀式です。同時に副住職と師弟関係が結ばれたこととなります。この儀式をしたからといって必ず子供達が僧侶として生きていく、歩んでいくとは限らないわけですが、子供達なりに今回の儀式の意義を感じてもらえたらと思っています。

長男の龍禪沙弥は「圓月龍禪上座」、次男の寛禪沙弥は「皎月寛禪上座」として僧籍をもつこととなります。得度式礼賛文の一節に「髪を断ずるは、愛根を断ずるなり」とあります。今後は実の親子であるということ以上に「師弟関係」が大切となりました。そのつもりで師弟ともに精進して参りますので今後ともよろしくお願い申し上げます。



星見天海老師評伝
 『蒼天の星』刊行



星見天海老師については別の記事にて詳細を紹介しますが、その天海老師の評伝が令和七年六月に刊行されました。著者の関根氏は新潟マツダ代表取締役社長、北陸マツダ代表取締役社長など数々の要職を歴任し、マツダを退職した後、著述家として活躍されている方です。昨年八月頃、自身の出身地である柏崎市の偉人・天海老師について調べるために龍源寺を来訪されました。

この評伝では、龍源寺住職が結制の折に刊行した「龍源の玉をばえても」や龍源寺副住職が昨年地元曹洞宗青年会会長として刊行した「越後妻有ふるさとのお寺」も参考文献として使用されております。評伝内では龍源寺もちろん登場して参りますのでぜひ手に取ってお読みしてみてください。考古堂より出版されております。

心の寺子屋塾 講演会



令和七年九月十三日、前号でお知らせした予定通り、十日町市曹洞宗洞泉寺副住職・石黒良和老師をお迎えして「思春期の心と親子関係」をテーマに講演会を開催いたしました。龍源寺副住職夫婦を含め八名の参加となりました。

石黒師は曹洞宗僧侶の傍ら、臨床心理士・公認心理師として活躍されておりますが、その知見や経験から実りある講演をいただきました。「八つ当たりは相手に対して信頼があるからできる」など、なるほどと思わされるお話を多岐に渡っていただきました。参加者におかれましてはきつとためになる講演になったことを確信しております。

今後も機会を設けて心に関する様々なテーマで開催できたらと考えております。興味ある方は是非ご参加ください。



本堂・渡り廊下裏 普請工事



長年の懸案事項でありました本堂と廊下裏の壁補修工事が始まっています。人工建材であって腐食が進んでいた壁を無垢材にします。合わせ、本堂裏から庫裡渡り廊下までの廊下部分の工事と本堂東司（トイレ）、水回りの工事と計二千二百万円近くかかる工事となっております。裏ですので檀信徒の御利用にはそこまで影響はございませんがご理解のほどよろしくお願い申し上げます。

庫裡除雪 環境整備工事



令和七年二月の寒波の連続により除雪が追いつかず、庫裡並びに衆寮堂に建物被害がございました。水による消雪を可能とするため、庫裡横のアスファルト工事を敢行いたしました。近年は極端な天候が続いております。その天候に負けないよう、引き続き龍源寺伽藍と境内の整備に努めて参ります。ご理解のほどよろしくお願い申し上げます。



祖先を
顧みようとしない人々は、
子孫のことも考えまい

善人がただ
何もしないだけで、
悪が栄えることになる

エドモンド・バーク

前回に続いて外国の方の言葉ですが、やはり日本人の生き方や信仰にも関わると思いましたので紹介します。この言葉はアイルランド王国生まれのイギリスの政治思想家・哲学者・政治家のエドモンド・バーク（1729～1797）によるものです。「保守思想の父」として知られ、フランス革命の源泉となったルソー主義を激しく非難した人物と言われております。『武士道』

の著者で知られる新渡戸稲造（1862～1933）もその『武士道』の冒頭で騎士道との対比で言及している人物です。「祖先を顧みようとしない人々は、子孫のことも考えまい」、祖先や先人たちがあつての私たちの命でありますので、私の命は私だけの命ではないと思います。祖先からつながってきた命であるならば、未来への意識を持って命を使う、すなわち自分なりの使命を持って生き、子孫につないでいくという意識が今の世の中には足りないのではないかと感じることがあります。

「善人がただ何もしないだけで、悪が栄えることになる」、SNSの隆盛で炎上商法など、悪目立ちしてなんぼのような世の中になってしまっています。善人であるが故に目立たないようになりに静かに過ごしている人が多いような気がします。「正直者がバカをみる」という言葉もありますが、正直さや素直さ、誠実さが世の中に広がってこそ優しさのある世界になっていくのではないかと私自身は思います。

私のこの文章は具体性の欠く抽象的なものではありませんが、心の持ちようというものをバークの言葉から感じていただけたら幸いです。

星見天海老師について



この文章は昨年刊行した「越後妻有ふるさとのお寺」の中で龍源寺副住職が執筆したものとなっております。内容は妻有寺院との関係に焦点が合わされていますが、この度の天海老師評伝の刊行に合わせて、ここに掲載致します。

参考文献

- 『星見天海老師の行状』鴻盟社
大正五年三月二十五日発行
- 『半雲遺稿』福勝寺
大正十二年七月一日発行
- 『龍源の玉をばえても』桑原行弘 深見山龍源寺
平成二十二年十月二十四日発行

かります。その途上、当時小国村で草庵を結び、一切経の閲読に取り組んでいます。病氣療養のため福勝寺に帰山、翌年には田沢村泉龍寺にても療養につとめます。発病の度に泉龍寺を療養の場を選んでるのは泉龍寺住職の相芳和尚(後に土市観泉院住職となる)が天海老師の実兄だったことによるためだと考えられます。

明治三年(一八七〇)、天海老師の師匠である俊龍和尚が遷化。後任として天海老師が福勝寺の住職となります。時に天海老師、三十八歳。以来、各地で活躍され、明治十一年(一八七八)には越後四箇道場の一つ、岩室の種月寺の住職に推薦されますがこれを固辞。翌年には新潟県令より柏崎の香積寺の住職辞令が届き、天海老師はこれも固辞されますが香積寺総代等の強い勧めによりやむなく香積寺住職となりました。香積寺には琢宗禪師も何度か来寺されたようですが、天海老師を慕い多くの雲水(修行僧)が香積寺に住み込み、さほど大寺ではないところにこれだけ大勢が集まっていることに琢宗禪師が驚かれたという逸話も残っております。明治十五年(一八八二)、琢宗禪師も住職を勤められた越後四箇道場の一つ、滝谷の慈光寺の住職となります。時に天海

明治期の曹洞宗を代表する師家(僧侶を指導するお立場)の一人に数えられる星見天海老師は、御出身が柏崎でありながら妻有地域各寺院と深い交流を持ちました。大訥愚禪老師に学び、滝谷琢宗禪師とはこの越後国内にて最も深い交流のあったお方でした。「漢字天海、仮字良寛」と呼ばれる程の能書家にして、「天海節」と現代にも語り継がれている声明の節回し、そして琢宗禪師が大本山永平寺を退かれた後に本格化した曹洞宗両本山の分離問題に總持寺側の調停役として分離を防いだ功績等、古の禪僧らしさがありながら曹洞宗を支えたお方でもありました。

天保四年(一八三三)、刈羽郡南條村の星野治兵衛の三男として生まれた天海老師は、天保十三年(一八四二)、平井村福勝寺の臥雲俊龍和尚に就いて十歳で出家致しました。嘉永四年(一八五二)、愚禪老師が松之山の陽廣寺に來山し、そこに天海老師も滞在。以来、愚禪老師に付き従い、各地で修行を重ねます。翌年、愚禪老師は台命(江戸幕府將軍からの命令)により吉祥寺住職となり、二十歳となった天海老師は梅檀林で学び始めます。嘉永六年(一八五三)、信州松本全久院にて修行を志します。が、人数過多により断念。そこで梅

老師、五十歳。この頃には越後を代表する名僧として天海老師は名を馳せていました。
明治十八年(一八八五)、大雄山最乗寺独住第三世であった琢宗禪師が大本山永平寺の六十三世となるのに伴い、時の大本山總持寺・畔上棟仙禪師の特選により、天海老師の大雄山最乗寺への転住が要請されます。そして明治十九年(一八八六)、天海老師は最乗寺の独住第四世の住職となります。三月に最乗寺に入られますが、八月に福勝寺にて仏事等を勤めたあと、その九月には泉龍寺、東光寺(現、十日町市倉俣)、龍源寺と訪ね旧交を温めております。明治二十年(一八八七)には曹洞宗大学林(現在の駒澤大学)総監、明治二十二年(一八八九)には曹洞宗大会議幹事に任じられました。明治二十四年(一八九二)には最乗寺の夏安居首座(集中的な修行期間の修行僧のリーダー)に龍源寺真静和尚の弟子、その冬安居首座には観泉院祖園和尚の弟子が勤め、七月には貝野村(現、十日町市貝野)の慈眼寺にて授戒会という大法要を勤めております。妻有地域との深い御因縁が見てとれます。

しかし、ここで大きな事件が起きてしまいます。明治二十五年(一八九二)、両本山分離の危機的事

檀林での学友であった中深見村(現、津南町船山)龍源寺の原松和尚(後の龍源寺十八世)の勧めにより龍源寺で生活を供にすることとなります。当時龍源寺では高橋赤山氏による「赤山義塾」が開塾されており、門下生からは明治維新後に活躍する政治家や経済人が輩出されました。天海老師も赤山氏の教えを受けた二人です。安政元年(一八五四)、一旦龍源寺を後にし、以来、各地を行脚し修行を重ねます。安政四年(一八五七)には龍源寺に戻り、割野村龍源寺末庵を拠点にします。しかし、安政六年(一八五九)に発病してしまい、龍源寺と田沢村(現、十日町市田沢)の泉龍寺の双方を行き来し、療養に努めます。体調が回復した天海老師はかねてよりの念願であった加賀天徳院に席を置き、奕堂禪師のもとで修行を重ねます。天徳院では森田悟由禪師(琢宗禪師の後に永平寺六十四世となられたお方)とともに「奕堂門下の二龍」として活躍され、悟由禪師とも無二の道友であったと言われます。慶応元年(一八六五)には琢宗禪師も天海老師を通して天徳院での修行に加わります。しかし、後に天海さまは眼病を発病し、真人村(現、小千谷市真人)の円蔵寺境内にあった眼科専門のお医者さんにか

以上に住職は勤めないという理由からです。時に六十九歳。以来、全国各地求めに、多忙な日々を過ごし、明治三十五年(一九〇二)には永平寺御開山道元禪師六百五十回忌大遠忌の西堂というお役もつとめられました。妻有地域各寺院にも度々訪れ、松之山温泉に湯治に來られた際には天海老師を訪ねた妻有寺院があったという記録も残っております。また、愚禪老師五十回忌、琢宗禪師七回忌にも参列されたようです。明治四十四年(一九二二)、横浜市鶴見において大本山總持寺御移転遷座式が挙行されますが、晩年の天海老師も出席されております。翌、明治四十五年(一九二二)に発病された天海老師は、大正二年(一九一三)に遷化されました。享年八十二歳のことでした。

しかし、ここで大きな事件が起きてしまいます。明治二十五年(一八九二)、両本山分離の危機的事



最乗寺結界門